

# 『椿説弓張月』の琉球イメージ

— 戦場・自決・スパイ —

波 平 八 郎

## 1. はじめに

本稿では『椿説弓張月』（曲亭馬琴作・1807～1811刊）で作られあげられた「琉球イメージ」を明らかにする。その琉球イメージは、戦場としての琉球、自決の場としての琉球、スパイとしての琉球人である。そして、そのイメージは近代の『ひめゆりの塔』でも踏襲されているということを論じる。

## 2. 琉球イメージの源泉

『椿説弓張月』（以下、『弓張月』）は、日本における琉球イメージの源泉であり、江戸時代後期から近代に至るまで、琉球イメージのプロトタイプを作りだしている。真栄平らはその影響が近代まで続いたことを次のように指摘している。

『椿説弓張月』のドラマチックな武勇談は、単に小説として人気を博したのみならず、琉球への関心を高めることになった。（略）この作品が日本人の琉球認識に多大な影響をあたえたことは無視できず、その影響は明治期まで続いたのである<sup>1</sup>。

また、横山學は『弓張月』による為朝伝説は近世以降、日本において琉球イメージを形成するのに中心的なメディアであったという事情を次のように指摘している<sup>2</sup>。

これ（『弓張月』波平注）によって為朝伝説はさらに広い層へ浸透してゆき、人びとは琉球を思う時「弓張月」を思い起こし、為朝と琉球とを結び付けたのである。この影響は近代にまで引き継がれた。

『弓張月』は浄瑠璃や芝居に仕立てられて上演されたり、錦絵として売り出されたりして大きな影響を与えた<sup>3</sup>。近代では、三島由紀夫による戯曲も上演された（昭和40年）。

このように、『弓張月』が近代に至るまでさまざまな影響を与えたということ

は多く指摘されている。しかし、その影響が具体的にどのようなものであったのかということについてはまだ指摘されていない。本稿は『弓張月』が作りだしたと考えられる「日本人の琉球認識」（真栄平ら・注1）——「琉球イメージ」を具体的に明らかにするものである。

### 3. 戦場

『弓張月』が描く琉球は「戦場」である。全編を通して女性や子どもを巻きこんだ血なまぐさい戦場が描かれる。為朝が戦う相手は矇雲と利勇である。『弓張月』では首里城をめぐるこの二者と為朝との戦いが描かれている。たとえば、為朝がもっとも苦戦した矇雲との嶋袋での戦いは次のように描写されている（56回「嶋袋を塞ぎて矇雲為朝を焼 余煙を払て王女良人を索」）。

大将は士卒をしらず、士卒は大将を見ず。風さへいとも烈しきに、山鳴動きて樹を倒し、砂を飛して面をうつ。これだにしばしも堪がたきに、前後左右に賊兵起つて、「為朝を逃すな。」と異口同音に呼びかけて、射る箭は雨よりなほ繁し。今まで勇る身方の軍兵、胆を冷さずといふものなく、或は乱箭に射倒され、あるひは株に踏み倒れ、おのが刃につきやぶられ、死するものいくばくといふをしらず<sup>4</sup>。

為朝の軍勢は敗れ、敵の矢が雨のように降ってくる。戦死者はどのくらいかしかないという状況である。為朝は袋小路に追いつめられ、火を放たれる。「猛火四面に散乱す」という状況で為朝は、死んだ馬の腹を切り裂き、その血を吸って喉をうるおし、馬のはらわたを掴みだしてその腹中に隠れて猛火を逃れる。

女性の登場人物、真鶴も壮絶な戦いで命を落とす。真鶴は寧王女を連れて逃げる途中、敵に襲われめった打ちにされて殺されてしまう。

肩を打し腕をくぢかれ、終に多勢に当りがたく、株につまづき、はたとまるべは、衆皆みな得たり、と棒とり直し、めつたうちに打つ程に、憐むべし真鶴は、肉破れ骨碎け、今宵ぞ死出の山蔭を、越来の露と消にける。（40回）

このように『弓張月』は全編を通して戦場としての琉球が描かれているのである。そこには南国の穏やかな風景というものはほとんど存在しない。「人びとは琉球を思う時『弓張月』を思い起こし、為朝と琉球とを結び付けた」（横山・注2）と指摘される琉球は戦場としての琉球であった。

そして、その戦場を舞台にして二つの際立つイメージがある。それは、「自決の場」としての琉球と「スパイとしての琉球人」である。まず、「自決の場」について、次に「スパイ」についての描かれ方を確認する。

#### 4. 『弓張月』での自決

主人公の為朝は保元の乱に敗れて九州に逃れ、琉球に流れてくる。為朝は敗走の武士であり、死に場所を求めて琉球にくる。この為朝は「自殺（切腹）」と強い関係がある。日本で最初に切腹をした人物であると伝えられているのである。たとえば、『貞丈雑記』（天保14・1843年刊）には次のように記されている<sup>5</sup>。

切腹の事（略）保元物語に為朝廿八にて家の中柱にうしろをあてゝ腹かき切りたれども死なれず、うしろの骨をふつと切てそふしたりけると見えたり。

此の頃より、武士勇気を人に見すべきが為に、腹を切る事始まりしなるべし。このように為朝は、「武士勇気を人に見」せるために日本で初めて切腹（自決）をしたと広く伝えられている。戦いに敗れて自殺（切腹）するというイメージと強く結びついている人物なのである。

『弓張月』の中でも、為朝は常に自殺することを考えている。何かあると自決をしようと試みる。上述の鳴袋の戦いにおいても一時は逃れられないと思って「刃を腹におし当し」（56回）と切腹寸前の状況にまで至った。自決へ向かおうとする為朝の様子を三島由紀夫は次のように述べている<sup>6</sup>。

英雄為朝はつねに挫折し、つねに決戦の機を逸し、つねに死へ、「孤忠への回帰」に心を誘はれる。

三島が指摘するように、『弓張月』の為朝はつねに「自決」を志向するのである。

『弓張月』では、のっぴきならない事態に直面して死を選ぶことの思想的な背景として、次のように「大和魂」が挙げられている。

事に迫りて死を軽んずるは、日本（やまと）だましひなれど（25回）  
ひとたび大事が迫ったときには、死を軽んずる —— 死を恐れないことが「大和魂」であるということである。

日本で最初に切腹をしたと伝えられる為朝のイメージに同調して、『弓張月』の主要な登場人物は「自決」するものとして描かれる。たとえば、為朝が琉球へ

漂着する記述では、数多くの人間が自決する様子が記されている。まず、次のように日本武尊の伝説がつつられる。

日本武尊、東夷征伐の折から、相模より船出して、上総へと赴き給ふに、暴風たちまちに起りて、皇子船漂蕩し、既にくつがへらんとしたりしかば、その妃弟橘姫命、皇子に代り、入水してうせ給へり。(31回)

日本武尊の船が嵐に覆ろうとしているのをその妃が身代わりに入水して助けた、という逸話である。これを受けて『弓張月』でも同様に物語が進む。為朝一行を乗せた船が嵐に覆ろうとしているのを、妻の白縫が入水して助けるという展開である。白縫と同時に為朝の郎党二十人余りが為朝を助けようとして自決する場面は次のように描かれている。

身をおどらしていり給ふ。あはれはかなき最後なり。(略) 命は君にたてまつりぬ。(略) おのおの刀を引抜て、或はさしちがへ、或は腹かき切り、舷よりまろびおちて、名をだにしらぬ荒海の底の水屑となりにけり。(31回)

為朝の郎党の高間太郎とその妻磯菫も自決する。その様子は次のとおりである。

「いひがひなく溺死せんより、吾妹子を手にかけて、自殺せば、すこしは心やりなりかし。御身はさも思はずや。」といふ声もよはりゆく夫の心中おしはかり、(略)「妹背の契絶ずして、夫の刃にかゝる事、過世にふかく結びけん、縁しこそ喜しけれ。」(32回)

そのまま溺死するよりは一緒に自殺しよう、ただ溺死するより「夫の刃にかゝる事」は嬉しい縁である、ということである。この言葉どおり、次のように夫は妻の胸を刺し、その後腹を切って自殺する。

いと白やかなる磯菫が胸のあたりへ閃くきつきき、ぐさとつらぬく一ト糸ぐり、さとほとばしる血刀を、とりなほしつゝ高間太郎も、腹一文字にかき切りたり。(32回)

為朝も妻や郎党が入水したのをみて「腹を切らんとし給ふ」(31回)と自決しようとする。

つねに自決を志向するのは、舜天丸(為朝の子)の養育役である紀平治も同様である。舜天丸が溺死したと思った紀平治は「腹かき切て三途の川も、死出の山路も紀平治が、負て越なん」(32回)と、後を追って切腹しようとする。

『弓張月』では為朝一行のみならず、琉球の歴史も自決の歴史として描かれる。

王妃廉夫人の父親（順徳）は讒言によって罪を得る。王府から自宅に討手を差しむけられて万策尽きたとき、家に火を放って切腹する。家来も順徳の後を追ひ、仲間同士で刺し違えて自決する。

家に火を放順徳は、腹かき切て失にければ、主に劣らぬ家隸郎党、さしちがへさしちがへ、煙の中に死するもあり。(34回)

廉夫人も娘の寧王女を助けるために、自身の命を捧げる。自分の首を差しだすことで敵を油断させようというのである。廉夫人の首を泣くなく取るのは、信頼している武士の松壽である。

廉夫人は、落たる剣かい取て、刀尖まとふ袂百合、うつぶきながら襟上へ、つらぬきて臥給へば、松壽はなくな、おん首を給はりて。(40回)

このように、『弓張月』では全編を通して、進退窮まったときには自決することが最終的な手段として描かれている。

『弓張月』の自決の基本的な形式の一つに、何かのため——国のため、肉親のために自身の命を捨てる、というものがある。寧王女も「身を殺して仁をなし、国民を救」おうと、自身の死によって国を救おうとする(34回)。その寧王女の死を救おうと、真鶴が身代わりを申し出る。身代わりに死ぬことを申し出た真鶴については、「健気也真鶴、忠と孝とに身を屠（ほふ）る、世に比なき少女ぞ」と賞賛される(34回)。その真鶴の母も、娘に心がかりな気持を起こさせまいと次のように自決する。

枕の下にかくしおきたる、短刀を閃りと引抜き、自害して失給ひ(34回)

このように主要な登場人物の多くは、国のため、肉親のためという理由で自決するか、自決を企てる。

為朝自身も琉球での戦乱が収まったのち、物語の結末では「速に故国へ歸りて、讃岐の院の山陵にて、はらかき切るの外なし」(67回)と日本へ切腹をしに帰る。『弓張月』で描かれる為朝の最後は、崇徳院の山陵の前で十文字に切腹している姿である。

身丈は七尺あまりにして、はらまきに朽葉色の狩衣したる武士、御廟の柱に身をよせかけ、腹を十文字にかき切てをり。(68回)

為朝は無事琉球を平定し、子の舜天丸が王になった。そのような状況で特に切腹する理由はないにもかかわらず、「腹を十文字にかき切」という最期を遂げ

ている。為朝は自決（切腹）と分かちがたく結びついているのである。

## 5. スパイ

戦場の琉球での際立つイメージの二つ目は「スパイ」である。スパイとしての属性が『弓張月』では松壽に与えられている。松壽は、物語全編をとおして終始琉球のヒーローとして活躍する琉球人である。

この松壽は、為朝と共に行動していながら敵方の利勇の下に武将として潜入している。いわばスパイとしての役割を果たしている。実際は為朝の側にいながら、表面上は敵方の利勇の武将として行動しているのである。この行動は正義を実現するためとはいえ、武士にとっては二心ある卑怯な行為である。松壽は自らの立場を次のように述懐する。

大臣利勇が寵に媚て、識者の為に譏（そしり）を厭はず。不忠と呼ばれ、不義と呼ばれ、汚れたる名も国の為に（60回）

スパイとしての不義不忠の汚名も国のために甘んじて受けるということである。スパイとしての性質上、松壽は敵方の矇雲や利勇らから次のように疑われていた。

只侮がたきは、東風平の按司陶松壽のみ。件の松壽は、原来毛国鼎が腹心のものにて、密に廉夫人の妹なる、命婦真鶴と夫婦の契約をいたし、偽りて利勇にへつらひこび、二なきものと思はし（44回）

そして、利勇らから疑われるのみならず、為朝にも疑心を抱かれるということが何度かあった。たとえば、次の場面はいよいよ利勇を討とうと計画する場面である。為朝は松壽に対してでも本心は見せられないと言っている。

乱れたる世の人心は、笑の中に刃をかくし、錦の囊（ふくろ）に毒をつゝむ。

松壽なりともうちとけては、大事を語らひがたし（54回）

戦乱の世では人の心はあてにならないという猜疑心の現われである。

また、為朝が松壽を厳しく咎める場面もある。次の場面は、嶋袋での戦いに敗れた為朝が敗走中に松壽と再会したとき、為朝が松壽を敵方のスパイではないかと疑って詰問するところである。松壽が「為朝を撃」とうとしていると疑っているのである。

頼がたきは人の心なり。かくまで忠義をおもふとならば、なぞや婦にともなはれ、割符をもてどうるい呼び聚はし、為朝を撃んとはせられし。こゝろ

得がたし。(60回)

松壽は自身が潔白であることを訴えるが、為朝は「呵々と冷笑(あざわら)ひ」、松壽が裏切ったという証拠を示す。松壽は為朝の疑いを晴らすために、一緒に生活をして妻とも呼んでいた女性(千歳)を殺す。

婦が帰らば一刀に、きりも殺して君が為、おのが自の為しかすがに、後の患を除ん(60回)

松壽は千歳こそが敵のスパイと思い斬り殺した。それに対して為朝は次のように松壽を賞賛する。

恩愛を棄、癡情に引れず、又この千歳を撃とめたる、手煉の太刀すぢ、勇あり義あり。(61回)

恩愛を棄てて妻千歳を斬り殺したのは、「勇あり義あり」ということである。

しかし、千歳のスパイ疑惑も誤解であった。この一段は、為朝が松壽を疑い、松壽が千歳を疑うという場面である。そしてそのいずれの疑いも事実ではなかった。このように戦乱の場において疑いが疑いを呼ぶ作用を『弓張月』では次のように表現する。

疑心すゞろに暗鬼を生ず。物うたがへば見ることあり。(61回)

狐疑するものは身方を伐る。(61回)

疑う心があると存在しないものごとをこしらえあげ、味方を斬ってしまうことになるということである。特に敗走中にこの疑心が生ずることが描かれている。「疑心暗鬼」、「狐疑するものは味方を斬る」、これが「戦場の琉球」で『弓張月』が描いたことである。しかし、琉球人のヒーロー松壽に関しては、実際に一貫してスパイの役割を果たしていた。それは武士道からすれば、二面性のある不義不忠の汚れた役割である。

## 6. 『ひめゆりの塔』の自決

現代において「沖縄・琉球イメージ」を作りあげたものの一つが「ひめゆり学徒」の物語である。「ひめゆり学徒」をめぐる言説が全国的に広がったのは、石野径一郎の小説『ひめゆりの塔』(1949～50年)がきっかけである。「ひめゆり物語の全国化」について、仲田晃子は次のように述べている<sup>7</sup>。

石野径一郎の小説『ひめゆりの塔』が契機となって「ひめゆり」が全国的な

話題となり、「ひめゆり」ブームとでもいうべき状況が現出した。(略)

石野の小説を契機に、「ひめゆり」はバレエや演劇、映画、浪曲など、さまざまな形で表現されていくようになる。

一つの物語がさまざまな上演形態で沖縄を描き、全国的に享受されるようなブームになるというのは、近世の『弓張月』と同様な状況である。

その『ひめゆりの塔』で描かれる沖縄も戦場である。『ひめゆりの塔』<sup>8</sup>では、沖縄での戦いを「沖縄戦は要するにこの難攻不落の首里を争奪する戦いにすぎなかった。」(p89)と記されている。首里を争奪する戦いというのは『弓張月』の戦いでの主要なモチーフである。

そして『弓張月』と同じく、戦場での「自決の場」として沖縄が描かれている。軍人が手榴弾で自決する場面のみならず、民間人が一家で自決する場面も描かれる。

たまには墓前で一家心中のようなものを見ることがあった。腐爛した農夫らしい老人の手が、かまをしっかりと握ったままでいるところをみると、嫁と孫とを殺害したあとで、そのかまで自決したものであろうかと考えられた。(p65)

司令部といっしょに首里からこちらへ下るとき、那覇の堂前医院の一家族が自決したという。(p116)

『弓張月』でも多く描かれている、肉親・家族で殺しあうという場面である。

戦場での自決の思想的な背景としては『弓張月』と同様に「大和魂」や「武士道」が持ちだされる。

「つまり、武士道とは死ぬことと見つけたり。—— 岡西校長先生と同じね」だれかがひとりごとのようにしていった。(p15)

カナは妹のミトを見ているうちに、ふとある予感で身の毛がよだった。校長によって強調された武士道の死である。(略)

「玉碎に決まったのよ！」(p183)

「こんなやつが、大和魂にどろを塗るんだ。日本軍人は生きて捕虜になるより死を選ぶのだ。日本人なら子供でも知っている。それをヤマトダマシイというんだ。(略)」(p189)

『ひめゆりの塔』で軍人によって語られる自決への誘導は、『弓張月』での



「日本（やまと）だましひ」と同様である。

## 7. 『ひめゆりの塔』のスパイ

また、戦場でのスパイも描かれている。軍人が敗走中に、沖縄人の中にスパイがいるという疑心にとらわれる。

スパイ嫌疑ということが流行になり、軍官民の間からどれほどその犠牲にたおれた人がいたかわからなかった。(p23)

「兵隊さんの間で、妙なことをいいふらして歩くものがあるって聞きましたけれど。—— アメリカの艦隊にのろしをあげて内通するものがあるとか、常識では考えられないことをいいふらす人が——」(p79)

スパイ行為をするなんて、まったくのデマよ。(p81)

「いっておくが、軍は絶対である！ スパイとまちがわれるような行動は、この第三外科からはただのひとりもだしてはならない。われわれの活動で重かつ大なるものは、その一つだ——」(p153)

「津嘉山といったけか？ おれがある生徒のなまいきをたしなめようとする、歌でもうたいませんかといった教員がいる。やつも教師のくせにスパイくさいですぜ」(p163)

『弓張月』において「疑心すゞろに暗鬼を生ず」、「狐疑するものは身方を伐る」として描かれていた状況が、『ひめゆりの塔』においても同様に描かれている。

## 8. まとめ

以上のように、本稿では『弓張月』が作りだした「琉球イメージ」は「戦場」のイメージであることを論じた。その戦場イメージの中でも特に、「自決」と「スパイ」が際立ったものとして描かれていることを明らかにした。そのイメージをまとめると次のとおりである。

- ① 戦場としての琉球
- ② 進退窮まった場合は自決
- ③ スパイとしての琉球人

『弓張月』を通して「人びとは琉球を思う時」（横山・注2）琉球と為朝とを戦場のイメージで結びつけた。その為朝は日本で最初に切腹（自決）した人物である。

「日本人の琉球認識」（真栄平ら・注1）は松壽によって表象されるものであり、それは不義不忠の徒であるスパイのイメージである。物語の中心的人物である琉球人・松壽は日本人にとって、二心ある・両属の人物であった。

そして、それらのイメージは近代においても『ひめゆりの塔』に代表される「ひめゆり学徒」「沖縄人」のイメージとして繰り返され表現されていることを指摘した。『弓張月』が作りだした琉球イメージは200年にもわたって醸成され続けているのである。

### 【柱】

1. 安里進・高良倉吉・田名真之・豊見山和行・西里喜行・真栄平房昭『沖縄県の歴史』（山川出版社）2004年 第1版第1刷 p149
2. 横山學「琉球物の流行と近世の琉球学」「文学 季刊」（岩波書店）第9巻第3号 1998年7月 p102
3. 水野稔「椿説弓張月」『日本古典文学大辞典 第四巻』（岩波書店）1984年第1刷 p291
4. 『弓張月』の引用は、後藤丹治校注『椿説弓張月 上』（岩波書店）昭和33年、後藤丹治校注『椿説弓張月 下』（岩波書店）昭和37年による。異体字は通行の字に直し、難読字はかなに直した。
5. 『貞丈雑記』（故実叢書）吉川弘文館 昭和3年 p614
6. 三島由紀夫「『弓張月』の劇化と演出」『決定版 三島由紀夫全集 25』（新潮社）2002年 p828
7. 仲田晃子『『ひめゆり』をめぐる諸言説の研究』研究代表者 仲程昌徳『アメリカ占領下における沖縄文学の基礎的研究』平成13年度～平成16年度科学研究費補助金 基盤研究（B）(2)研究成果報告書 平成17年3月 p60
8. 『ひめゆりの塔』の引用は、石野径一郎『ひめゆりの塔』（講談社文庫）1994年第28刷による。